



Fig. 2-2-41 Mineralization Map of the Camarones Area



岩、石英閃緑岩、閃緑岩、閃緑斑岩、花崗閃緑岩)と、その周辺の母岩(上部白亜系;K, 上部白亜系・古第三系;KT)に発達する。

カマローネス沢流域の黄鉄鉱化帯中の西部、中央部及び東部の3カ所に銅鉱物の鉱染部が存在する。以下、それぞれ、カマローネス沢西部鉱化帯、中部鉱化帯、東部鉱化帯と呼ぶ。

西部鉱化帯の銅鉱化は石英斑岩岩体を中心としてその周辺の上部白亜系(K)に及ぶ。石英斑岩岩体中では、沢の両岸とも180mにわたって割れ目から銅を含む緑青色メタアルノーゲン(Meta-alunogen)がしみ出ており、一部に石英網状脈が発達している。表面に緑色酸化銅鉱物や黒銅鉱が鉱染している石英斑岩の内部は、珪化、緑泥石化及びセリサイト化した岩石中に輝銅鉱、黄銅鉱、黄鉄鉱等が鉱染している。また、石英斑岩岩体周辺のプロピライト中にも石英脈に伴われた緑色酸化銅鉱物、黄銅鉱、輝銅鉱等の弱鉱染が認められる。沢の北岸で実施された試錐(CCH-2)は孔底深度220mで、深度0~220m間の平均Cu品位が約0.15%、うち、深度97.5~109.5m間にはCu品位約1.00%の二次富化帯を捕捉している。沢の北方500~1100m間には石英斑岩の角礫パイプが存在し、その中に石英・電気石の網状脈と褐鉄鉱の鉱染が発達するが、銅鉱物は認められない。

中部鉱化帯の銅鉱化は、比較的規模の大きな石英閃緑岩岩体と石英斑岩質角礫パイプ、石英閃緑岩質角礫パイプ、閃緑岩、閃緑斑岩の各小岩体が集中している場所の近傍に位置し、プロピライト中の緑色酸化銅鉱物・黄鉄鉱の鉱染からなる。

東部鉱化帯の銅鉱化は、角閃石化及びセリサイト化変質を受けた閃緑岩中の緑色酸化銅鉱物の弱鉱染からなる。

カマローネス沢の南支流に発達する黄鉄鉱帯は、珪化・セリサイト化した流紋岩質火砕岩中に鉱染する細粒黄鉄鉱からなり、表層部では黄鉄鉱の酸化により褐鉄鉱、カオリン、明礬石、鉄明礬石等が形成されている。

#### b. 南端部地区の鉱化帯

調査地域南端部に分布する石英閃緑岩に貫入する閃緑斑岩中に緑色酸化銅鉱物及び褐鉄鉱・赤鉄鉱の弱鉱染が認められる。この閃緑斑岩は緑泥石化、セリサイト化及び電気石化を受けている。銅鉱染部の北約150mには、大きな黄鉄鉱仮像を多く含む赤鉄鉱・石英細脈が発達し、また、石英閃緑岩中にはカリ長石の細脈が認められる。

#### c. 北西端部地区の鉱化帯

調査地域北西端部に分布する石英閃緑岩中には、石英細脈が多数発達する。石英脈の主体は乳白色の粗粒結晶からなるもので、局部的に網状脈を形成している。この石英脈を後期生成の玉髄質石英細脈が切っている。母岩には珪化、緑簾石化、セリサイト化、角閃石化、黒雲母化、カリ長石化等が認められる。前期生成の石英脈には、緑簾石、黒雲母、電気石及びカリ長石が伴われることがあり、また、黄鉄鉱の存在を示唆する褐鉄鉱・赤鉄鉱からなるポ